

## *The Portrait of a Lady* の 二つの世界の中の money

武藤 恵子

従来 Henry James の作品には money に関して何の苦労も味わうことのない裕福な人物たちが描かれていると指摘されてきた。<sup>1)</sup> 一代で莫大な財産を築いた祖父や、その遺産に頼り自らは money のために働くことなく生活していた父を持つ James は、労働者階級 of 家庭に育ったとは言えず、それが故に彼は富裕な人物ばかりを描いているのだとも思われよう。確かに彼の作品には労働者階級の者たちの姿はほとんど見ることはできないが、しかしだからと言って彼と money を切り離して考えられるというものではない。James の覚書や書簡には、常に money にこだわって生きていた彼の姿がある。James の作品には労働と結びついた money は見られなくとも、別の形で money は現れ、plot に大きな影響を与えているのである。彼の初期の作品、*The American* や *Washington Square* を考えた時、その主人公達の運命に大きな影響を与えるものに money があることは否めない。また、後期の傑作の一つ、*The Wings of the Dove* にも、その plot の根底に money が存在している。<sup>2)</sup> そこで本稿では彼の初期の最高傑作の一つ、*The Portrait of a Lady* を取り上げ、彼の作品には欠かすことのできない money に注目して論じて行く。

この作品は1881年に初版が出版されたもので、1908年に New York 版出版の際、James はそれに 'Preface' を付し、そこでこの作品の plot についてふれている。

The point is, however, that this single small corner-stone, the

conception of a certain young woman affronting her destiny, had begun with being all my outfit for the large building of "The Portrait of a Lady."<sup>3)</sup>

ここで言う "a certain young woman" つまりこの作品の主人公 Isabel Archer の運命に大きな影響を与えたのが money であると考えられる。彼女が伯父から多額の遺産を受け取った時、彼女の人生の方向は大きく変わったのである。James はさらに "Place the centre of the subject in the young woman's own consciousness"<sup>4)</sup> と言っている。そこでその James の言葉を受け、Isabel の視点から money をとらえ、作品の展開に沿って様々に変化して行く彼女の money についての考え、つまり彼女の money 観を考えることで、この作品の中で money がどういった役割をもっているのか、そして James 自身の money 観を考察する。

## I

Isabel は明確な money 観を持たず、しかも大した財のない少女として我々の前に登場する。その彼女の money 観は彼女の子供の頃の様子から読み取ることができる。彼女は子供の頃、小学校の規律に窮屈さを感じ、それよりもむしろ祖母の家の "the bolted door" (1: 31)<sup>5)</sup> と窓に張られた "the green paper" (1:31) で外の世界とは隔絶された "office" (1: 30) と呼ばれる部屋で imagination をめぐらせて遊ぶことを好む少女であった。

She knew that this silent, motionless portal opened into the street; if the sidelights had not been filled with green paper she might have looked out upon the little brown stoop and the well-worn brick pavement. But she had no wish to look out, for this would have interfered with her theory that there was a strange, unseen place on the other side — a place which became to the child's imagination, according to its different moods, a region of delight

or of terror. (1:30)

ここから彼女の周りには現実のある「外の世界」と彼女の imagination の場である「内の世界」という二つの世界が存在することが分かる。彼女は外にある現実の世界には目を向けず、自分の内なる imagination の世界に閉じこもっている少女として描かれている。ここで育った彼女の money への意識は “I don’t know anything about money” (1:34) というものである。彼女は money の有無やそれから生まれる物質的豊かさや社会的地位といった「外の世界」のものには全くの無関心で、ただ自分の好奇心を膨らませ、「内の世界」の自由のみを楽しんでいる。

彼女は money には無関心という状態のまま「内の世界」の延長として彼女のいとこ Ralph Touchett の住む Gardencourt へやって来る。ここで Isabel が結婚相手としては最適と思われる二人の金持ちの男性からの求婚を断るのだが、これには彼女の money に対する感情が反映されている。彼女は結婚というものを考えた時、“The idea of a diminished liberty” (1:162) を抱き、結果として彼女の imagination の自由のためにはそれは障害であるとして、精神的な窮屈さを感じる。つまりこの時の彼女は money をもたない自分が、彼らとの結婚によって彼らが前面に出して彼女に見せつけてくる money の力の前に屈せざるを得ない恐怖を感じ、あたかも彼らの money によって自分が所有されてしまうかのような圧迫感を抱くのである。彼女のこの求婚への拒絶は Isabel が彼らの money がもたらす物質的豊かさよりも精神的自由を選んだことを示している。

さらに次の Isabel と Madame Merle の会話に注目したい。

‘... I [Madame Merle] know a large part of myself is in the clothes I choose to wear. I’ve a great respect for *things*! One’s self — for other people — is one’s expression of one’s self; and one’s house, one’s furniture, one’s garments, the books one reads, the company one keeps — these things are all expressive.’

‘... I [Isabel] think just the other way. I don’t know whether I succeed in expressing myself, but I know that nothing else expresses me. Nothing that belongs to me is any measure of me; everything’s on the contrary a limit, a barrier, and a perfectly arbitrary one. Certainly the clothes which, as you say, I choose to wear, don’t express me; and heaven forbid they should!’ (1: 287)

ここに見られる異なる二つの価値観は、彼女の「内の世界」と彼女の周りにある「外の世界」という二つの世界を特徴づける。それらは人間の内面にあるものを尊重する世界と money がもたらす目に見える物質を尊重する世界として現れている。この作品の初期の段階での彼女の money 観では money を彼女の imagination にとって邪魔なものとして感覚的にとらえており、Isabel は money のある「外の世界」よりも「内の世界」を尊重し、そこでの自由を生き生きと謳歌しているのである。

## II

ここで Isabel の「内の世界」の延長として登場した Ralph のいる Gardencourt と Ralph の持つ money 観について考察する。Ralph は自分の世界観をしっかりと持った人物である。そしていつも彼の心の “the private apartments” (1:82) から外にある “the world” (1:82) を客観的に観察している。彼は人の外的な、表層的な素晴らしさや、物質的豊かさといったものよりも、むしろ内面にある人間性を観察し、人のもつ豊かな想像力や知的的好奇心というものを評価している。Ralph の住む Gardencourt は彼の世界が具現化したものと言えよう。

It stood upon a low hill, above the river — the river being the Thames at some forty miles from London. A long gabled front of red brick, with the complexion of which time and the weather had played all sorts of pictorial tricks, only, however, to improve and

refine it, presented to the lawn its patches of ivy, its clustered chimneys, its windows smothered in creepers. The house had a name and a history; . . . this was in quite another quarter. Privacy here reigned supreme. (1: 2-3)

ここから Ralph は現実の社会とは距離を隔て、歴史や芸術、文化や自然といったものに囲まれて生きていることが分かる。つまり、そこは物質の尊重される「外の世界」とは隔絶された彼自身の世界、money の横行する物質世界とは一線を置いたところに存在する彼の精神世界であると言える。しかし Ralph は money を含めすべての「外の世界」を拒絶しているのではない。彼の短期間ではあったが、銀行で働いた経験は彼に十分な money 社会への知識を与えたであろう。彼が間接的にはあるが Isabel に多額の money を与える時、彼の意図は次のようなものである。

If she has an easy income she'll never have to marry for a support. That's what I want cannily to prevent. She wishes to be free, and your [Mr. Touchett's] bequest will make her free. (1: 261)

彼は現実社会の中で結婚を含め money がないために経験するであろう制約や抑圧から精神を解放し、自由をもたらすものとして money をとらえている。そしてその money があってこそ、彼のように現実社会から独立した自分の世界を作ることができるのだと考えていると思われる。

このような意味から Ralph が Isabel に与えた money だが、彼女は彼のように money をとらえることはできず、突然の大金に大きく当惑する。そして彼女は多額の money の使い途に money を所有する者としての責任を強く感じる。

' . . . A large fortune means freedom, and I'm afraid of that. It's such a fine thing, and one should make such a good use of it. If one should n't one would be ashamed. And one must keep thinking; it's a constant effort. I'm not sure it's not a greater

happiness to be powerless.' (1: 320)

ここで“ashamed”とあるように Isabel は初めて「外の世界」の「他」を意識し始めたことが分かる。そして、彼女にとっては未踏の地である「外の世界」の中での様々な経験を可能にする力を持つ money に彼女の imagination は刺激され、また彼女はそれに魅了される。この money によって彼女の目は外に向き始め、それまで「内」に向けられていたエネルギーを「外」で精一杯放散するかのよう活発に行動を取り始める。ある意味で Ralph の意図は成功したかのようにも見えるが、しかしそこには Ralph と Isabel の money に対する認識の違いが現れる。Ralph にとって money とはそれがないことで味わうかもしれない現実社会での不自由さを取り除くものとしてのもの、つまり、彼女の imagination をより広げるために物質世界からの自由をもたらすものとしてとらえているのに対し、Isabel は imagination のおもむくままに物質世界の中で行動する自由をもたらすものとしての money を理解する。それがこの時の彼女の money 観なのである。

しかしこの money が先にふれたように Isabel の運命に大きな影響を与えるのである。この money を得た後の彼女は Gilbert Osmond との結婚を決意するが、これには彼女が大金を手にしたことが大きく関係している。彼女がこの結婚を決意した理由には、第一にこのわずかな財産しかない男のために money を使うことが彼女の money の適切な用途なのだと考えたこと、第二に自ら決断したこの結婚に責任を持ち、独立した人間として自分の money で生きて行くのだということにある種の自己満足感を抱いたこと、そして第三に以前二人からの求婚を受けた時とは異なり、この結婚では money を与える者とそれを受ける者との立場が逆転し、money を持つ身となった Isabel は現実の中にあっても以前のように他人の money からの圧迫感に恐怖する必要がないこと、以上の三点が考えられる。これらから彼女の結婚はこの money が引き起こしたものだと言えよう。しかし、結果としてこの結婚が彼女にもたらしたものは Ralph の精神世界から Osmond の

いる「外の世界」への彼女の居場所の移動、彼女の立場の変化である。

### III

Isabel の結婚を通して Osmond の世界の具体的な特徴を見る。Osmond はエゴイスティックなディレクターで money に対する強い執着心を持っている。彼は money への欲望を洗練された身のこなしや表面的な愛想の良さの下に見事に隠してはいるが、そもそも彼が Isabel に求婚したのも彼女の money が目的であったことは明らかである。先の Madame Merle の言葉にあったように Osmond も人を判断する時、その人の内面よりもその人の所有するものや容姿等の外見に価値基準をおいている。彼にとって人が持つ money の額がその人の価値を決定づけるのである。勿論彼自身、money をより多く得て高価な芸術品に囲まれて生活することにあこがれを抱いているのであり、その欲望のためにも Osmond は money に執着する。Osmond にとって Isabel は彼女の持つ money の額が多ければ多いほど価値のある結婚相手になる。そして彼の信条、“one ought to make one’s life a work of art” (2: 15) にあるように、他人を一つの芸術品として価値判断を下す。そして彼の娘 Pansy を自分の意志を持たず父親に対して柔順な人形のように育て上げている。彼は人を芸術的視点から判断し、芸術として価値のある外見を持つ者を自分のコレクションとして収集しようとする。Isabel にも彼の所有する芸術品の一つとなることを望んでおり、そのためには Isabel の imagination や彼女の自由意志といったものは全くの不要物となる。それ故 “he would have liked her to have nothing of her own but her pretty appearance” (2: 194) と推察される。

Osmond の money に対する俗悪な欲望が最も端的に現れるのが Pansy の結婚問題に関してである。Oscar Cargill は “The evil is partly exposed in little Rosier’s sharing with Gilbert Osmond the view that Pansy is an *objet d’art*.”<sup>6)</sup> と Osmond と Pansy への求婚者 Edward Rosier

が彼女を“物”として扱っていることを指摘しているが、しかし彼らの間には Pansy を“an *objet d'art*”として扱うだけでなく、さらに売買しようとするかのような会話が見られる。

Osmond と Rosier との間には Pansy という芸術品をオークションにかけての売り手と買い手の間の money の駆け引きが行われるのである。Rosier は Pansy を“a Dresden-china shepherdess” (2: 90) と表現し、彼の“*I esteem a dot very much. I can do without it, but I esteem it*” (2: 96)という言葉には、彼にとって Pansy につけられる持参金が彼女の価値であることが現れている。一方 Osmond は娘婿となる男が Pansy にもたらずであろう money の額やその男の存在の芸術性にこだわっている。彼の言葉“*I set a great price on my daughter*” (2:121) は彼が自分の娘さえも高価な芸術品として売値をつけている様子が分かるであろう。Osmond のいる物質世界では洗練された愛想の良い態度という仮面に彩られた社交会の裏にいつも money への欲望が隠れており、人々はそこで money から得られる物質的豊かさに喜びを見だし、money をより多く持とうとする。彼らの心は money によって支配されてしまっていると言えよう。

Osmond の物質世界の中で Isabel は以前 Ralph の世界にいた時とは大きく変化する。

The years had touched her only to enrich her; the flower of her youth had not faded, it only hung more quietly on its stem. She had lost something of that quick eagerness to which her husband had privately taken exception — she had more the air of being able to wait. Now, at all events, framed in the gilded doorway, she struck our young man [Rosier] as the picture of a gracious lady. (2: 105)

ここには Ralph の世界にいた時の Isabel の生き生きとした姿はなく、Osmond の芸術品の一つ、まさに“*portrait*”となっている彼女の姿が見られる。彼女は Pansy の結婚に際し、夫の欲望を満たすべく Pansy をイ



ギリス貴族と結婚させるよう協力すべきか、Pansy の気持ちを尊重してその協力を拒むかのジレンマに陥る。そして夫の望むように行動しようとした時、彼女は偽善者たる自分を感じる。さらに Osmond と Madame Merle の関係に気付く彼らの money への執着の欲深さを理解した時、Isabel は Osmond との結婚によって飛び込んだその世界の実態を理解し、自分の周りの状況を見直し、彼女が Osmond の所有物として閉じ込められていることに気付くのである。

Between those four walls she had lived ever since; they were to surround her for the rest of her life. It was the house of darkness, the house of dumbness, the house of suffocation. Osmond's beautiful mind gave it neither light nor air; Osmond's beautiful mind indeed seemed to peep down from a small high window and mock at her. Of course it had not been physical suffering; for physical suffering there might have been a remedy. She could come and go; she had her liberty; her husband was perfectly polite. He took himself so seriously; it was something appalling. Under all his culture, his cleverness, his amenity, under his good-nature, his facility, his knowledge of life, his egotism lay hidden like a serpent in a bank of flowers. (2: 196)

この“walls”に閉ざされた閉鎖的な空間こそ Osmond のように money への欲望にとらわれた物質中心主義の人間の偏狭さや排他性の現れであろう。その“walls”の外では Osmond は他者に対して洗練された愛想のよい仮面を見せ、一方で心の内に俗悪な money への執着を隠している。そこは金持ちで芸術品として価値があると彼に認められた者しか入ることを許されない領域であり、彼の秘密の宝箱のようなものであろう。Isabel はその中に彼の宝物の一つとして閉じ込められていたのである。物質世界の中で money が彼女にもたらしたものは想像力の束縛と自由意志への抑圧であり、この事実気付いた時、Isabel の money への意識は大きく変化する。

At bottom her money had been a burden, had been on her mind, which was filled with the desire to transfer the weight of it to some other conscience, to some more prepared receptacle. (2: 193)

ここで彼女にとって Osmond との結婚をもたらす発端となった money は精神的苦悩の元凶以外の何物でもなく、嫌悪すべき対象になったのである。

#### IV

Isabel を中心に彼女と money との関係を考え、彼女の money 観の変化をたどった時、この作品の中には対立する Ralph と Osmond の二つの世界が存在し、そしてそこに二つの money 観が見えてきた。D. L. Mull はこの点を次の様に言う。

The novel presents, then, two senses of money: money as envelope of circumstances, operative within the realm of actuality, . . . and money as potential, as a fact of the imagination, nonoperative because existent only within the static realm of ideality.<sup>7)</sup>

Mull の指摘にもあるように Osmond の物質世界の中で人の物質的欲望のために働く money と、Ralph の世界の中で物質的な制約から精神を解放し、心の自由を得るために現実の money 社会から精神的領域を確立するために働く money がこの作品の中には描かれている。二つの世界の中での Isabel の経験に伴う彼女の money 観の変化には James 自身の money 観が反映されていると思われる。この作品の二つの世界と Isabel の関係から James の money 観を考察する。

Osmond の俗悪な物質世界とそこで Isabel が受けた精神的苦悩には、James 自身の当時の物質主義的な商業社会での経験が大きく関係している。James は裕福な家庭に育ったものの決して安穩とした執筆活動を許されていた訳ではない。彼は少しでも多くの money を稼ごうと一種の強迫観念め

いたものをもって作品を次々と書いていた。James 自身当時の商業主義のアメリカを *Washington Square* の中で次のように書いている。

In a country in which, to play a social part, you must either earn your income or make believe that you earn it, the healing art has appeared in a high degree to combine two recognized sources of credit. It belongs to the realm of the practical, which in the United States is a great recommendation; and it is touched by the light of science — a merit appreciated in a community in which the love of knowledge has not always been accompanied by leisure and opportunity.<sup>8)</sup>

ここには money につながる実際的な仕事をするということが当時のアメリカでは価値のあることであり、また実際的な仕事に従事するものが尊敬を受けていた社会であったことがうかがえる。彼が執筆活動を通して money を稼ぐというのは彼にとって社会的地位を得るために必要なものであったのである。そのために彼が作品の連載をめぐる出版社と交渉するなど money にかなり執着した様子も彼の手紙の中に伺える。例えば *The Portrait of a Lady* の連載に関して書かれた W. D. Howells への手紙がある。

The vision of a serial in Scribner does not, I may frankly say, aesthetically delight me; but it is the best thing I can do, so long as having a perpetual serial running has defined itself as a financial necessity for me. When my novels (if they ever do) bring me enough money to carry me over the intervals I shall be very glad to stick to the *Atlantic*.<sup>9)</sup>

しかし一方で商業社会では大衆に受ける作品でなければ money につながらず、その中で知的文学者が強いられていた弱い立場に文学者として少なからず James は苦痛を味わったに違いない。豊かな想像力を持つ者が money 中心の物質社会の中で味わうこの苦悩が Isabel の苦悩として表されていたのであろう。

さらに James は Osmond に見られた華やかなヨーロッパ社交会というものにあこがれてもいた。彼はフランスの社交会で様々な貴族や文豪たちと交流をもつのだが、しかしやがて James に向けられるのは彼らの表面的な愛想の良さばかりだと気が付き、結局彼らの中には入ることのできない疎外感を味わう。彼は兄への手紙の中で “I am still completely an outsider here”<sup>10)</sup> ともらしているように、money による栄華に彩られた社交会を羨望の眼差しで外から眺めていた様子が分かる。Leon Edel は当時の James を次のように説明する。

In James's time there were in these streets a great many fine old *hôtels*, with their wide gates and coachyards. James had hoped that some of these gates would swing open for him.<sup>11)</sup>

これは James が描いた Osmond の世界の表面的な愛想のよさの裏の排他性を思いおこさせる。我々が Osmond を通して見てきた物質社会とは James 自身が経験してきた money 中心の現実社会である。それは表面的な美しい仮面を被った社会であり、しかしその中には money に対する欲望が渦巻き、そしてそこでは money を持たぬ者は相手にされないのである。それ故、James は更に money を稼ぐことに執着したのではないだろうか。

James は money に対し、現実生きるために執着心を抱きつつ、その一方で money の二次にされてしまう芸術性に苦痛を感じてもいたのだろう。彼が money に関して味わった苦悩は Isabel の精神的苦悩として現れている。つまりこの Isabel の物質世界の中での精神的苦悩を通して James は心の豊かな者が money によって圧迫されてしまう現実を表していると言えよう。

## V

James にとって Ralph の世界が意味するものが作品の最後に表れている。Isabel が苦悩を通して Osmond の世界を理解した後、James は

Ralph を “an apostle of freedom” (2: 245) と表現する。ここから彼は Ralph を精神的な自由に満ちた神聖なる世界の代表者として、それに対し Osmond をそれとは対照的な俗悪な欲望に満ちた邪悪なる世界の代表者として明確に描き始める。Isabel が Osmond の反対を押し切って死の床にある Ralph に会いに行く時、James が結局物質世界よりも精神世界を優位に考えていたと言える。

再び訪れた Gardencourt は Isabel の目には次のように映る。

All purpose, all intention, was suspended; all desire too save the single desire to reach her much-embracing refuge. Gardencourt had been her starting-point, and to those muffled chambers it was at least a temporary solution to return. She had gone forth in her strength; she would come back in her weakness, and if the place had been a rest to her before, it would be a sanctuary now. (2: 391)

Isabel にとって Gardencourt は Osmond のいる物質世界からの「避難場所」であり、いかなる金銭的な問題からも隔離された「聖域」として映る。ここからも James が Ralph の世界を神聖なものとしてとらえていることが分かる。money に心を支配されてしまっている Osmond の世界とは異なり、Ralph の世界では人が money を支配している。Osmond のように money に心を縛られることなく生きること、つまり Ralph のような money との関係で生きingことを James は望んでいたのではないだろうか。

Osmond の世界で苦悩を味わった後の Isabel は以前 Ralph に聞いていたようにそこで ghost に会う。その ghost の出現する精神世界というのが James の求めている世界を特徴づける。James は最愛のいとこ Minny の死について書いた手紙の中で次のように書いている。

She has gone where there is neither marrying nor giving in marriage! no illusions and no disillusion — no sleepless nights and no ebbing strength. The more I think of her the more perfectly

satisfied I am to have her translated from this changing realm of fact to the steady realm of thought.<sup>12)</sup>

ここに表されている『絶えず移り行く事実の世界』というのが Osmond の世界であり、『安定した思考の世界』というのが Ralph の世界だと言えよう。つまり、Ralph の世界とは James が憧れ求めるある種の理想郷であり、James はそれを現実の物質世界とは別の世界として彼の作品の中に作り上げたのである。

しかし Minny や Ralph の死に象徴されるようにその理想郷は『死』によってしか行くことのできないものとして描かれている。Isabel は Ralph の死後再び Osmond の元へと帰って行く。それは Gardencourt が死期の近い者しか住むことを許されない領域であるからであろう。このことは Ralph の死に平行して Gardencourt が衰退し荒廃しつつあることから分かる。人は生きている限り現実から逃れて理想郷へは入って行けないのであり、従って money 中心の社会の中で money に関わりながら生きて行かざるを得ないのである。それ故に Ralph や Mr. Touchett はそこに住むことはできても、Isabel や Mrs. Touchett はそこに住むことはできなかったのである。James は自分の理想世界を求め続けながらも、この世で生きている限りそれは彼の作り上げた幻想的世界にすぎないのだと認識していたと言えよう。結局 James は money によって現実の商業社会に縛り付けられていたのである。

以上のように、この作品の中には対極する二つの世界が存在し、それに伴って二つの money 観が表されていることが分かる。これら二つの世界には James 自身の money に対する感情が大きくかかわっている。James にとって money は現実社会の嫌悪すべき対象であり、それから逃れるべく彼の理想郷を別世界に築いているが、他方で現実生きて行くために money を求める欲望をも持っている。このような彼の矛盾した money への態度が

Ralph と Osmond を生み出し、その中に Isabel を投じることで James は自分の確固とした money 観を探していたのではないだろうか。

#### 註

- 1) 例えば Desmond MacCarthy は “Money, Birth, and Henry James” (*The New York Statesman* 9. July 21, 1917) で James の登場人物たちを “those apparently enjoying such immense immunities towards money” (375) とし、また Arthur L. Scott は “A Protest against the James Vogue” (*College English* 13. January, 1952) の中で James が “the cerebral portion of life among the rich” (198) ばかりを描いていると指摘している。他に Geoffrey Tillotson の *Criticism and the Nineteenth Century* (Archon Books, 1967) や Fred Lewis Pattee の *A History of American Literature Since 1870* (New York: Cooper Square Publishers, Inc. 1968) を参照のこと。
- 2) *The American* では主人公のアメリカ人ビジネスマン Christopher Newman が彼の持つ money を目当てとした Bellegarde 家の人々の強欲さにその運命を振り回され、*Washington Square* では主人公 Catherine Sloper の結婚についての彼女の父 Dr. Sloper と彼女への求婚者 Morris Townsend の衝突に彼女の持つ money が大きく関係し、それに彼女の運命は左右される。*The Wings of the Dove* では Milly Theale の財産を狙った Kate Croy と Merton Densher の行動が作品の plot の中心である。
- 3) Richard P. Blackmur, ed., *The Art of the Novel: Critical Prefaces* (New York: Charles Scribner's Sons, 1937), 48.
- 4) Blackmur, 51.
- 5) Henry James, *The Portrait of a Lady*, Vol. 1 and Vol. 2 of *The New York Edition of Henry James*, Vol.3 and Vol.4. (New York: Charles Scribner's Sons, 1936) からの引用であることを示す。以下、このテキストからの引用はすべて括弧内にその巻数及び頁数を表すものとする。

- 6) Oscar Cargill, *The Novels of Henry James* (New York: Macmillan, 1961) 96.
- 7) Donald L. Mull, *Henry James's 'Sublime Economy'* (Middletown, Connecticut: Wesleyan UP, 1973) 110.
- 8) Henry James, *Washington Square* (New York: Penguin, 1988) 27.
- 9) Leon Edel, ed., *Henry James: Selected Letters* (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1987) 137.
- 10) Percy Lubbock, ed., *The Letters of Henry James* (New York: Octagon Books, 1970) 59.
- 11) Leon Edel, *Henry James: A Life* (New York: Harper, 1985) 196.
- 12) Edel, ed., 78.